

# 蛙の独り言

登米祝祭劇場館長

山田 悦且

歌の授業をする機会を得たことだった。校歌は昭和26年の制定。民俗学者や古代学者、歌人として折口信夫が作った。高尚な文学。だが、生徒には難しいと思った。そんな折、OBでもない私

ら彼は記紀や続日本紀の記述を基に、古代の登米市を連想して作詞したは

行間には『不断の努力を怠るな』という、ごん身の遺言を散りばめた。ゆえに、校歌の概念を超える秀作となった

授業後、校歌は「佐沼高だけでなく、登米地域への贈り物」と感じた。当劇場は市民が主体となつて文化を発信してきた。その理念は不易。その頷いた瞬間「劇場も市民の宝」と気づいた。メモ帳にすぐさま「市民が支える登米祝祭劇場」と記した。

きっかけは佐沼高校歌

## 「本物」を追い求めて

「登米の本物」と題したメモ帳が手元にある。だれもが「当たり前」と感じている中から、独断で選んでいる。既に評価を受けている文化財などは対象外だ。

「チュウモン」などと呼ばれる農家の門構え。三滝堂の清流とカジカガエル。伊豆沼周辺に群れ

るメダカ。「助(す)け」など古代語が残る方

「転勤する先生の多くが『校歌を歌い継いで欲しい』と言が残す。そこ

中で編んでいた。そこには国の復興を次世代に期する思いを込めた。歌集の題名は悲運の皇子・日本武尊を指す。だか

当劇場近くの佐沼高校で、格調高い校歌の内容

を生徒に理解してもらいたいと考えた」と鈴木信也校長。説得力を持たせ

るため、部外者に白羽のも名高い泰斗・釈道空Ⅱ矢が立ったのだろう。

授業で述べた推論は次のような内容だった。



ボランティアが創り上げた第9回登米市民劇場「わが命は風にのって」＝2月22日、登米祝祭劇場での総げいこ(伊藤正裕さん撮影)

モノトーンの野辺彩れる春蘭を愛しと思ふとの曇る朝

登米祝祭劇場